

謝靈運「山居賦」とその自注

東, 美緒
九州大学大学院人文科学府 : 修士課程修了

<https://doi.org/10.15017/1462138>

出版情報 : 中国文学論集. 42, pp.10-23, 2013-12-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

謝靈運「山居賦」とその自注

東 美 緒

東晋末期から南朝宋の初期を生きた謝靈運（三八五〜四三三）は、いわゆる山水詩を数多く残し、当時の人々にもてはやされた。そのような彼の作品に「山居賦」がある。彼の出生地でもある会稽郡始寧県（今の浙江省嵊州市）の住まいを中心に、その周辺の山川や自らが経営する莊園・精舎などを描写した辞賦作品である。当時の貴族が経営してきた莊園の様相を伝えるものとしても、貴重な資料と考えられている。

「山居賦」に関する考察は、山水詩の考察と比べれば、その数は決して多くはなく、しかもそのほとんどは、山水詩研究に関連づけて取り上げたものである。それは、やはり「山居賦」が山水文学の一形態として捉えられているからであろう。しかし、筆者はこうした考察から一旦離れ、「山居賦」に対し謝靈運自らが付したとされる自注に着目し、それらがもつ特徴を分析すると共に、その目的について私見を述べたい。

一 「山居賦」自注の特徴

「山居賦」の内容は、序を別とすると、四十七の段落に分けることができ、その一々に自注が挿入されている。句数・字数は、残念ながら闕字も少なくないため正確には把握できないが、正文においては七百句以上に及び、字数についても正文が約四千字、注に至っては約五千字と、実に膨大なものとなっている。そして謝靈運の伝を収める正史『宋書』は、この「山居賦」の正文ばかりか、注も全文を収録しており、史書中に引用する賦作品としては異

例の処置がとられている。^③

文学作品における自注について、赤井益久氏が唐代に至るまでの状況をまとめた際、漢魏六朝時代の状況にも触れており、「王逸が『楚辞』施注の際に自作「九思」に注した例や謝靈運が「山居賦」に自注した例などが先蹤としてみとめられるものの、自注の例はきわめて少ない」としている。^③ 赤井論文は中唐の元稹の自注について考察したものであるが、唐代に至ってもなお自注の稀有なことを指摘する。賦というジャンルに限らず、中国の古典文学全体を通して、「山居賦」の自注は特異な存在なのである。

ここから、筆者は「山居賦」の自注と他作品の注とで相違点はないか、それは「山居賦」においていかなる役割をもつものなのかを考察することを試みた。考察にあたっては、注のもつ特徴ごとに独自にグループ分けを行い、以下の七つに分けた。

- (A) 単語や句ごとの解釈。
- (B) その章全体、あるいは複数の句の要約。
- (C) 音注の列挙。
- (D) 文献の引用、及びそれによる傍証。
- (E) 自身や祖父謝玄についての説明。
- (F) 付近に住む、あるいは住んでいた人物の紹介。
- (G) 自身の体験によると思われる記述。

以下、本稿では「山居賦」注において特に独自性が際立つE・F・Gの諸例について取り上げたい。

(E) 自身や祖父謝玄についての説明

〈第四章〉

覽明達之撫運、乘機緘而理默。

明達の撫運を覽、機緘に乗じて理默す。

指歲暮而歸休、詠宏徽於刊勒。

歲暮を指して歸休し、宏徽を刊勒に詠む。

謝靈運「山居賦」とその自注

狭三閭之喪江、矜望諸之去國。三閭の江に喪はるるを狭しとし、望諸の国を去るを矜る。

選自然之神麗、盡高棲之意得。自然の神麗なるを選び、高棲の意得を尽くす。

〔自注〕余祖車騎建大功淮肥、江左得免橫流之禍。後及太傅既薨、遠圖已輟。於是便求解駕東歸、以避君側之亂。廢興隱顯、當是賢達之心。故選神麗之所、以申高棲之意。經始山川、實基於此。

余が祖車騎（謝玄）大功を淮・肥に建て、江左横流の禍を免るるを得。後太傅既に薨るに及び、遠図已に輟む。是に於いて便ち駕を解きて東歸せんことを求め、以て君側の乱を避く。廢興隱顯、當に是れ賢達の心なるべし。故に神麗の所を選び、以て高棲の意を申ぶ。山川を經始す、實に此に基づく。

〈第二十七章〉

緡綸不投、置羅不拔。

緡綸 投げず、置羅 抜かず。

磻弋靡用、蹄筌誰施。

磻弋 用うる靡く、蹄筌 誰か施さん。

鑑虎狼之有仁、傷遂欲之無崖。

虎狼の仁有るを鑑み、遂欲の崖無きを傷む。

顧弱齡而涉道、悟好生之咸宜。

弱齡を顧みて道を涉り、好生の咸宜しきを悟る。

率所由以及物、諒不遠之在斯。

由る所を率めて以て物に及び、遠からざるの斯に在るを諒る。

撫鷗鰲而悅豫、杜機心於林池。

鷗鰲を撫して悅豫し、機心を林池に杜ざす。

〔自注〕八種皆是魚獵之具。自少不殺、至乎白首、故在山中、而此歡永廢。…自弱齡奉法、故得免殺生之事。苟此悟萬物好生之理。

八種皆な是れ魚獵の具なり。少きより殺さず、白首に至る、故に山中に在りて、而も此の欲び永へに廢す。…

弱齡より法を奉ず、故に殺生の事を免るるを得。苟に此れ万物好生の理を悟る。

第四章では祖父であり東晋を北方の脅威から救った車騎將軍謝玄の隱居について、第二十七章では幼少より無用な殺生を行わなかったという自身について述べる。父祖の功業を顯彰することは、古来より中国の伝統思想だと思

われるが、謝靈運の場合、特に謝玄への敬慕は強い。「文選」卷十九に収められる「述祖德詩二首」においても、祖父の業績を盛んに褒め称えている。今その序を見ると、

太元中、王父龕定淮南、負荷世業、尊主隆人。逮賢相祖謝、君子道消、拂衣蕃岳、考卜東山。事同樂生之時、志期范蠡之舉。

太元中、王父（謝玄）淮南を龕定し、世業を負荷して、主を尊び人を降ぶ。賢相祖き謝り、君子の道消ゆるに逮び、衣を蕃岳より払い、東山に考卜す。事は樂生（樂毅）の時を同じうし、志は范蠡の挙を期す。

靈運が謝玄を特に尊敬する点は、国難を救うという大功を挙げながら、時機を見計らって会稽へ引き払ってしまったという、出処進退の潔さにある。「山居賦」と「述祖德詩二首」二作品においてこのことを述べるのは、尊敬の強さの表れであろう。「山居賦」においては、それを更に自らの隠棲への憧れに繋げている。

靈運は元々「専ら自分を語る詩人」であると小尾郊一氏は指摘しているが、この「山居賦」においても、仏教の教えに基づき、他の都城賦のほとんどに描写が挿入される狩獵を行わないことを表明した第二十七章の注のように、自らの生き方・考え方を述べる箇所が随処に見られる。しかしこの自身についての記述こそは、自注を考える上で無視できない。それは当然ながら謝靈運自身しか知り得ず当人でしか書けない情報だからである。後世、北斉の顔之推「觀我生賦」の自注も、同じく当事者によってしか説明し得ないことを誌した例である。

「觀我生賦」は、顔之推が、梁から侯景の乱を経て北斉へ移ったものの、その北斉が更に隣の北周に滅ぼされたという中で生きてきた、激動の生涯を自ら綴ったものである。そしてその注は、賦中の人物や当時の出来事について克明に記している。その一部を挙げると、

逮微躬之九葉、頽世濟之聲芳。微躬の九葉に逮び、世濟の聲芳を頽す。

問我良之安在、鍾厭惡於有梁。我が良の安くにか在るを問い、厭惡を有梁に鍾め、

養傳翼之飛獸、子貪心之野狼。傳翼の飛獸を養ひ、貪心の野狼を子とす。

（顔注）梁武帝納亡人侯景、授其命、遂爲反叛之基。武帝初養臨川王子正德爲嗣、生昭明後、正德還本、特封臨賀王、猶懷怨恨。經叛入北而還、積財養士、每有異志也。

梁武帝亡人侯景を納れ、其の命を授け、遂に反叛の基を為す。武帝初め臨川王子正徳を養ひて嗣と為すも、昭明を生むの後、正徳本に還り、特だ臨賀王に封ぜらるのみにして、猶ほ怨恨を懐く。叛を経め北に入りて還り、財を積みて士を養ひ、毎ごとに異志有るなり。

この注では、梁が壊滅的な打撃を被るほどの反乱を起こした侯景と、彼と手を組んで帝位を狙った王族蕭正徳が、二心を抱いたきっかけについて記している。「觀我生賦」注のもう一つの特徴は、書物からの引用が全く見られないことである。早い段階で成立していた歴史資料を参照した可能性も大いにあるが、少なくとも書名を挙げることはしておらず、注は顔之推自身の記憶と体験を中心に構成され、従来の注のように訓詁や出典となる文献の引用ではなく、賦によつて綴つた自身の人生についての、より詳細な補足説明を目的としている。そしてこれは亡び去つた梁と北斉の歴史記録でもあり、顔之推と同じように北朝に移ることを余儀なくされた南朝の人々にとっては、心を打つものがあつたに違いない。

元南朝の知識人である顔之推は、謝靈運のことは言うまでもなく、「山居賦」についても知悉していたことだろう。「山居賦」と「觀我生賦」は、共に自らの人生を語るという点で共通する。そしてその方法として、自注という形態はまさにうつつけであつたのである。

(F) 付近に住む、あるいは住んでいた人物の紹介

〈第十章〉

近北則二巫結湖、兩智通沼。 近北には則ち二巫湖を結び、兩智沼を通ず。

〔自注〕 義熙中、王穆之居大巫湖。經始處所猶在。

義熙中、王穆之 大巫湖に居す。經始する処所 猶ほ在り。

〈第十二章〉

遠南則松箴棲雞、唐巖漫石。

遠南には則ち松箴・棲雞・唐巖・漫石あり。

崒嶭對嶺、崒孟分隔。

崒・嶭、嶺に對ひ、崒・孟分かれ隔つ。

〔自注〕：「漫石」在唐嶺下、郗景興經始精舍、亦是名山之流。：崒山甚奇、謂白爍尖者最高、下有良田、王敬弘經始精舍。曇濟道人住孟山、名曰「孟球」、芋薯之膠田。

〔漫石〕は唐嶺の下に在り、郗景興精舍を經始す、亦た是れ名山の流なり。：崒山は甚だ奇なり、白爍尖と謂う者最も高く、下に良田有り、王敬弘精舍を經始す。曇濟道人孟山に住み、名づけて「孟球」と曰ふ、芋薯の膠田あり。

〈第三十章〉

苦節之僧、明發懷抱。

苦節の僧、明発に懷抱す。

事紹人徒、心通世表。

事は人徒に紹ぎ、心は世表に通ず。

〔自注〕謂曇隆法流二法師也。二公辭恩愛、棄妻子、輕舉入山、外緣都絶、魚肉不入口、糞掃必在體、物見之絶歎、而法師處之夷然。

曇隆・法流の二法師を謂ふなり。二公恩愛を辭し、妻子を棄て、輕挙して山に入り、外縁都て絶え、魚肉は口に入れず、糞掃は必ず体に在り、物之を見て絶歎するも、法師之に処ること夷然たり。

この当時、多くの貴族が会稽に住んでいた。その大半は晋の南遷に伴つて移住してきた北來の貴族であり、最たるものとして謝靈運の祖先である陳郡謝氏と、東晋の中興に貢獻した王導やかの王羲之などを輩出した琅琊臨沂王氏などがいた。また『宋書』隱逸伝に名を残す隱者たちを見てみれば、会稽剡県の戴顓、阮万齡、孔淳之、始寧の王弘之など、会稽に住まう者が多いことがわかる。こうした人々の中で、自注では始寧の近辺に隱棲していた人物についての解説が行われている。

第十章の注に見える王穆之については、東晋の義熙年間（四〇五～四一八）に生きていた人という情報以外、不詳である。時に謝靈運は二十一～三十四歳、交友関係があつた可能性は十分に考えられる。

謝靈運「山居賦」とその自注

第十二章の注に見える郝景興は、郝超のこと。桓温の参軍で、談論を善くし、靈運の祖父謝玄の叔父にして、淝水の戦いにて大功を上げた謝安と論じあつたことがある。また彼の伯母の夫が王羲之であるなど、琅琊臨沂王氏とも縁の深い家柄である。若くして重病を患い、母の喪に服した後は官職に就かず、四十歳で亡くなつた。王敬弘は、琅琊王氏の一族である王裕之のこと。名が宋武帝劉裕の諱に触れるため、字の敬弘で通つている。「性恬淡にして、山水を樂しむ」人柄であり、官に召されても固辞して就かなかつた。『宋書』隱逸伝によれば、始寧隱棲中に謝靈運が交際していたという王弘之や孔淳之とも交友があつたという。それならば謝靈運と接する機会もあつたことだらう。

また、会稽の山々で修業を行つた僧侶についても数人記されており、その内の曇濟と曇隆の名を、梁の慧皎『高僧伝』中に確認できる。特に曇隆は、「謝靈運の重んずる所と爲り、常に共に嵎嶽に遊ぶ」間柄であり、彼が亡くなつた際、靈運は「曇隆法師誄」を制作してその死を悼んでいる。

このように、作者本人と時代を同じくする人物、特に王裕之や曇隆など、「山居賦」成立の時点で存命中の人物をも取り上げることが、興味深い特徴の一つである。これらの注は、少なくとも本文の内容を理解する上では必要ないものであるが、謝靈運にとつては書かねばならない自注の一要素だつたに違いない。「山居賦」より以前の作品である「兩都賦」・「二京賦」・「三都賦」などはいずれも成立よりも過去の時代を中心として、歴史故事・人物の注を付しているが、作者と時代を同じくする人物を注に登場させた例は、謝靈運以前の時代においては管見の限り見られない。これもまた「山居賦」注の独自の点と言えるだろう。

(G) 自身の体験によると思われる記述

〈第十二章〉

入極浦而遭回、迷不知其所適。 極浦に入りて遭回し、迷ひて其の適する所を知らず。

上嶽崎而蒙籠、下深沈而澆激。 上は嶽崎として蒙籠たり、下は深沈として澆激たり。

〔自注〕清溪秀竹、廻開巨石、有趣之極。此中多諸浦澗、傍依茂林、迷不知所適。「嶽崎」「深沈」、處處皆然、

不但一處。

清溪・秀竹、巨石を廻り開き、有趣の極まる有り。此の中諸の浦澗多く、傍らは茂林に依り、迷ひて通ずる所を知らず。「峽崎」「深沈」は、処処皆な然り、但だに一処のみならず。

〈第二十九章〉

爰初經略、杖策孤征。
爰に初めて経略し、策を杖つきて孤り征く。

入澗水涉、登嶺山行。
澗水に入りて涉り、嶺山に登りて行く。

陵頂不息、窮泉不停。
頂を陵ぎて息まず、泉を窮めて停まず。

櫛風沐雨、犯露乘星。
風に櫛り雨に沐し、露を犯し星に乗る。

〔自注〕云初經略、躬自履行、備諸苦辛也。

初めて経略するに、躬自ら履行し、諸の苦辛を備ふるを云ふなり。

〈第三十三章〉

若迺南北兩居、水通陸阻。
若迺ち南北の兩居、水通じて陸阻む。

觀風瞻雲、方知厥所。
風を觀 雲を瞻て、方に厥の所を知る。

〔自注〕「兩居」謂南北兩處、各有居止。峯嶸阻絶、水道通耳。「觀風瞻雲」、然後方知其處所。

「兩居」は南北兩處を謂ふ、各の居止有り。峯嶸 阻絶し、水道通ずるのみ。「風を觀 雲を瞻」、然る後に方に其の処所を知る。

〈第三十四章〉

南山則夾渠二田、周嶺三苑。
南山は則ち夾渠二田、周嶺三苑。

九泉別澗、五谷異嶺。…
九泉澗を別にし、五谷嶺を異にす。…

謝靈運「山居賦」とその自注

〔自注〕南山は開創卜居之處也。從江樓歩路、跨越山嶺、綿亘田野、或升或降、當三里許。塗路所經見也、則喬木茂竹、緣眇彌阜、橫波疎石、側道飛流、以爲寓目之美觀。及至所居之處、自西山開道、迄于東山、二里有餘。南悉連嶺疊郭、青翠相接、雲煙霄路、殆無倪際。

從逕入谷、凡有三口。方壁西南、石門世□南、□池東南、皆別載其事。緣路初入、行於竹逕、半路闊、以竹渠澗。既入東南傍山渠、展轉幽奇、異處同美。路北東西路、因山爲郭。正北狹處、踐湖爲池。

南山相對、皆有崖巖。東北枕壑、下則清川如鏡、傾柯盤石、被隩映渚。西巖帶林、去潭可二十丈許、葺基構宇、在巖林之中、水衛石階、開窗對山、仰眺曾峯、俯鏡濬壑。去巖半嶺、復有一樓。迴望周眺、既得遠趣、還顧西館、望對窗戶。

緣崖下者、密竹蒙逕、從北直南、悉是竹園。東西百丈、南北百五十五丈。北倚近峯、南眺遠嶺、四山周回、溪澗交過、水石林竹之美、巖岫隈曲之好、備盡之矣。刊翦開築、此焉居處、細趣密翫、非可具記、故較言大勢耳。越山列其表側傍緬□□爲異觀也。

〔南山〕は是れ開創卜居の処なり。江樓より歩路、山嶺を跨越し、田野を綿亘し、或いは升り或いは降ること、當に三里許りなるべし。塗路の経見する所や、則ち喬木・茂竹、眇に縁り阜に弥り、橫波・疎石、側道・飛流、以て寓目の美觀と爲す。所居の処に至るに及び、西山より道を開き、東山に迄るまで、二里に余り有り。南は悉く嶺を連ね郭を疊ね、青翠相い接し、雲煙 霄路、殆ど倪際無し。

逕より谷に入るに、凡そ三口有り。方壁の西南、石門世□南、□池の東南、皆別に其の事を載す。路に縁りて初めて入り、竹逕を行き、半路にして闢け、竹渠の澗を以てす。既に東南に入りて山渠に傍ひ、幽奇を展転し、処を異にして美を同じうす。路の北の東西路は、山に因りて郭を爲す。正北の狭き処、湖を踐みて池と爲す。南山は相對し、皆な崖巖有り。東北は壑を枕にし、下れば則ち清川 鏡の如く、傾柯・盤石、隩を被ひ渚に映ず。西巖 林を帯び、潭を去ること可そ二十丈許りなり、基を葺き宇を構へ、巖林の中に在り、水衛石階、窓を開きて山に對し、仰ぎて曾峯を眺め、俯して濬壑を鏡とす。巖を去ること半嶺にして、復た一樓有り。迴かに望み周ねく眺めて、既に遠趣を得、西館を還顧し、窓戸に望對す。

崖に縁りて下る者、密竹 逕を蒙^{おほ}ひ、北より南に直^{あた}たる、悉く是れ竹園なり。東西に百丈、南北に百五十五丈。北のかた近峯に倚り、南のかた遠嶺を眺め、四山周く回り、溪澗^{こもこも}交過ぎ、水石林竹の美、巖岫^{がんしゅう}隈^{わい}曲^{きま}の好、備さに之を尽くす。刊翦し開築し、此焉に居処するに、細趣 密翫、具さに記すべきに非ず、故に較^やや大勢を言ふのみ。越山は其の表側に列にし傍緬^{ぼう}□□異観と為す。

このグループは、彼の体験や感想を記述したものとして分類できる。まず第十二章の注は、「迷いて通ずる所を知らず」と、彼が実際にこの周辺を歩いた際に迷った経験があることを想像させるものである。第二十九章は、彼が新たに家屋を建てるための適所を求め、風雨に晒されながら昼夜を分かたず自ら山中を巡った、その苦勞を述べるものとなっている。

難しいのが第三十三章で、「風を觀雲を瞻て、然る後方に其の処る所を知る」という注は、正文「觀風瞻雲、方知厥所」の解説であるべきなのだが、この箇所に関してはもはや文字だけで伝えるのが困難な、実際にその場にいる者にしか体感しえない情報だと考えられる。

特に正文二五五字、注文三五二字（闕字含む）と、共にかなり多い字数を誇る第三十四章の注には大きな問題がある。他の章の注文は、そこに見える単語や句、あるいはその章全体について、順番の前後は多少あつても、内容に即した説明を与えてくれていたが、この注は単語や句についての説明も、出典の引用もほとんどない。よく見れば正文に即したと思われる箇所も見られるが、むしろ全く別個の文章として成り立っているようにさえ見えるのである。この箇所については、次節でまとめとともに私見を述べたい。

二 自注の果たした役割

「山居賦」自注に見られた特徴をまとめると、次のようになる。

- ・ 謝靈運本人や祖父の謝玄、また当時周辺に住んでいた隱者や僧侶についての解説がある。

謝靈運「山居賦」とその自注

・ 自分自身の体験に基づいた記述がある。

・ 山川の位置や距離についての説明が極めて詳細な箇所がある。
最後にこれら自注の果たした役割について、些か考察を加えてみたい。

前節で挙げた第三十四章の注について、斎藤希史氏は、この注を「地形をある歩みに沿って描く」ことに主眼を置いているとし、「一方が整った対偶を、一方が移動する視点を表現の基軸にしているとするとするのなら、「山居賦」の山水描寫はこの二つの表現軸が交差するところに成立している」と述べている。これによれば、整った対偶を構成する正文の視点はあまり動いていないということだが、筆者は正文と注はひとまず並行して世界を描いていると考える。時に誇張が混入する正文に対し、注は現実の風景を、距離や広さ、方角などの現実的な情報も交えつつ淡々と描いている。謝靈運は、賦自体の修辭の過多に対し、注に描く世界の持つ写実性を持ち出してバランスを保ったのである。

この他、第七章の、東側の住宅近辺を描く場面の正文と注とを挙げると、

近東則上田下湖、西谿南谷、

近東には則ち上田・下湖、西溪・南谷、

石塚石滂、閔劭黃竹。

石塚・石滂、閔劭・黃竹あり。

決飛泉於百仞、森高薄於千麓。

飛泉を百仞に決し、高薄を千麓に森ぶ。

寫長源於遠江、派深惑於近瀆。

長源を遠江に寫ぎ、深惑を近瀆に派かつ。

〔自注〕「上田」在下湖之水口、名爲田口。「下湖」在田之下、下處並有名山川。「西谿」「南谷」分流、谷鄣水吠入田口。西谿水出始寧縣西谷鄣、是近山之最高峯者、西溪便是□之背。入西谿之裏、得「石塚」、以石爲阻、故謂爲「塚」。「石滂」在西谿之東、從縣南入九里、兩面峻峭數十丈、水自上飛下。比至外谿、封墜十數里、皆飛流迅激、左右巖壁綠竹。「閔劭」、在石滂之東谿、逶迤下注良田。「黃竹」與其連、南界菁中也。

〔上田〕は下湖の水口に在り、名づけて田口と爲す。「下湖」は田の下に在り、下る処並びに名山川有り。「西溪」「南谷」は流れを分かち、谷鄣の水は吠ぎて田口に入る。西溪の水は始寧縣の西谷鄣より出づ、是れ近山の

最も高き峯なる者にして、西溪は便ち是れ□の背なり。西溪の裏に入り、「石塚」を得、石を以て阻と為す、故に謂為らく「塚」と。「石滂」は西溪の東に在り、渠南より九里に入り、両面は峻峭なること数十丈、水は上より飛下す。外溪に至るに比ひよび、封燈ほうとうは十数里、皆な飛流迅激にして、左右は巖壁緑竹あり。「閔劬」は、石滂の東溪に在り、透迤てういとして下り良田に注ぐ。「黄竹」は其れと連なり、南のかた莆中かきを界かきるなり。

注には、単語についての説明とともに、第三十四章の注と同じく、謝靈運がその目で見て、その足で歩いて確かめた情報が記されている。残りの三方位や、遠方の東西南北についての注も同じように書かれている。これは辞賦に多い「○○則：」という書き出しの章を単語の列挙のみに終始せず、読者がイメージを膨らませやすくなるよう配慮したものだと考えられる。実際、注が解説するのは、ゴチック体で示した単語の並ぶ前半部分のみである。このように、謝靈運にとって「山居賦」注は、正文とセットでなくてはならない、欠くべからざるものとなっているのである。

「山居賦」序文に、「覽る者は張左の艷辭を廢し、台皓の深意を尋ね、飾を去り素を取り、儻たういは其の心に値うのみ（覽者廢張左之艷辭、尋臺皓之深意、去飾取素、儻值其心耳。」と述べる箇所がある。「張左」とは、後漢の張衡と西晋の左思のことを謂い、さらに彼らを代表する辞賦作品である「二京賦」及び「三都賦」を指しているよう。謝靈運の意図は、張衡や左思の華麗な辞賦を意識し比較しながら「山居賦」を読んでもらうことであつたと思われる。その一方で、彼には「飾を去り素を取る」こと、すなわち流麗な文章とはまた別に、その中に散りばめられた、ありのままの会稽の景物を読者に想像してもらおうという目的もあつたように思える。辞賦においては、左思「三都賦序」に見られるように、正文の流麗さに対し、写実性の有無が問題となつた。謝靈運にとつては、作品に華麗さと高い写実性を兼ね備えてこそ、先人を超えることが可能だつたはずである。そしてその実現には、彫琢を凝らした文章だけでは足りず、また注釈を加えるとしても、単なる辞書的な説明に終わつては到底伝えきることではできないと考えたのかもしれない。かくして謝靈運は、賦の正文に加え、注釈についても自ら筆を執つたのである。

「二京賦」や「三都賦」など、絢爛な京都の賦の後に成立した「山居賦」は、より写実性を高めた、会稽の自然や

人々の暮らしなどをリアルに伝えようとした。そのために謝靈運は自らの手で注を付し、美しい正文の世界と、写実を重んじる自注の世界とを併存させようとしたのではないだろうか。

注

- (1) 本稿掲載の「山居賦」本文については、『宋書』所載のものに拠り、訓読や訳について森野繁夫訳『謝康樂文集』（白帝社、二〇〇〇年）を参考とした。またテキストについての詳細は、顧紹柏校注『謝靈運集校注』（中州古籍出版社、一九八七年）附録六「輯録所拠底本及參考本一覽表」を参考に次の諸本を参照した。
- (梁) 沈約撰『宋書』卷六七 謝靈運伝
- (初唐) 歐陽詢撰『藝文類聚』卷六四 居処部 齋
- (初唐) 徐堅撰『初学記』卷二八 果木部 竹
- (北宋) 李昉等撰『太平御覽』卷三四九 兵部 箭、卷九七一 果部 林檎・棗、卷九八四 藥部 藥
- (明) 劉節（一四七六～一五五五）輯『広文選』卷六（東京大学蔵、明嘉靖年間本）※正文のみ
- (明) 焦竑（一五四〇～一六二〇）撰『謝康樂集』卷一（復旦大学図書館蔵明万曆十一年沈啓原刻本）
- (明) 梅鼎祚（一五四九～一六一五）輯『宋文紀』卷一〇（『文淵閣四庫全書』所収）※序文のみ
- (明) 張溥（一六〇二～一六四一）撰『漢魏六朝百三名家集』「謝康樂集」卷一
- (2) 史書に収録された賦の自注については、清の錢大昕『二十二史考異』卷二十四 謝靈運伝の条において、「作「山居賦」并自注以言其事」という記述に対し、「按ずるに、宋世の文士、謝顔を以て首と為す。故に各の專伝を立つるも、靈運伝には其の兩賦を載せ、「山居」一篇、自注を并べ亦た詳らかに之を載す。休文（沈約）の謝に傾倒すること至れり。此の例は前史に未だ有らず、之を継ぐ者は張淵の「天象」・顔之推の「觀我生」なり。十七史中、唯だ此の三賦注有るのみ。「按、宋世文士、以謝顔爲首。故各立專傳、而靈運傳載其兩賦、「山居」一篇、并自注亦詳載之。休文之傾倒於謝至矣。此例前史未有、繼之者張淵之「天象」・顔之推之「觀我生」。十七史中、唯此三賦有注耳。」と、「山居

賦」も含め例が三つしかないことを指摘している。

- (3) 赤井益久「自注の文学——『元氏長慶集』を中心として——」(『中国古典研究』第四七号、二〇〇二年)。
- (4) 謝玄など、謝一族の者が謝靈運の文学に与えた影響については、佐藤正光『南朝の門閥貴族と文学』(汲古書院、一九九七年)に詳しい。
- (5) 『謝靈運 孤独の山水詩人』前編「謝靈運の生涯」三「孤独の山水詩人」(汲古書院、一九八三年)。
- (6) 『北齊書』卷四十五「文苑伝」顔之推の条。
- (7) 『宋書』卷九十三「隱逸伝」参照。
- (8) 『晋書』卷六十七「郗鑒伝」において、孫として伝を付されている。
- (9) 『宋書』卷六十六「王裕之伝」。
- (10) 『宋書』卷九十三「隱逸伝」孔淳之の条に、「服闋やみ、(孔淳之) 徵士戴顓・王弘之及び王敬弘等と共に人外の游を為す〔服闋、與徵士戴顓・王弘之及王敬弘等共爲人外之游〕。」とある。
- (11) 共に『高僧伝』卷七。曇濟は曇斌の、曇隆は僧鏡の伝に付されている。
- (12) 斎藤希史「謝靈運の山居——〈居〉の文学(二)」(『中国文学報』第六二冊、二〇〇〇年)。